

|  |               |        |                      |                      |
|--|---------------|--------|----------------------|----------------------|
| 日本語によるオンライン異文化交流Sail<br>～コロナ禍におけるシニアのアクティブ化と国際意識変化の検証～ | <b>取組開始時期</b> | 令和2年6月 | <b>取組の<br/>カテゴリー</b> | 情報化(ICT・IoT・AIの利活用等) |
|--|---------------|--------|----------------------|----------------------|

|                          |                       |                                 |
|--------------------------|-----------------------|---------------------------------|
| <b>1. 団体名</b> 株式会社 Helte | <b>2. 連携先の<br/>団体</b> | 神戸市・神奈川県・奈良女子大学・東京大学 高齢社会総合研究機構 |
|--------------------------|-----------------------|---------------------------------|

|   |                        |   |
|---|------------------------|---|
| <b>3. 取組目的</b> 対面でのコミュニケーション機会を制限され孤立化する日本人と日本語を学ぶ外国人とを「Sail」でつなぎ、日本人のアクティブ化を検証します。 | <b>4. 関連する<br/>ゴール</b> |  |
|---|------------------------|---|

**5. 取組詳細（取組内容の詳細及び取組によって得られた成果、今後の方向性等）**

**背景**

- ・日本では高齢化および孤立孤独が社会課題となっている。
- ・今後日本では外国籍の労働者が増える見込みであるが、外国籍の方の日本語会話力に課題があり地域に溶け込めないこと、また日本人側の国際意識の低さが課題となっている。

**取り組みの詳細**

コロナ禍で活動が制限されている市民団体やボランティア団体などを自治体よりご紹介いただき、Sailによる国際交流および実証実験を紹介する説明会を実施。賛同いただいた方がSailに登録をし、国際交流を開始。定期的の実証実験アンケートにご回答いただく。



**期待される成果と今後の方向性**

- ・Sailによる国際交流で日常生活もアクティブになっている（定性的評価）
- ・実証実験アンケートの結果を解析して科学的根拠を示し（定量的評価）、市民に広く活用されることで日本の孤立や孤独といった社会課題解決の一助となる。

**取組のポイント（3つの視点）**

**地方創生SDGsの視点**

・孤独を感じる日本人に国際交流機会の提供。生きがいづくりや国際意識の醸成。・日本で生活予定又は既に生活している外国籍の人へ会話練習機会を提供し、地域に溶け込むための土台づくり。

**ステークホルダーとの連携**

行政（神戸市・神奈川県）：国際交流やICTを活用した他者との交流に興味のある市民団体を紹介いただき、活用された結果を報告。研究機関（奈良女子大学・東京大学）：実証実験アンケートを解析し、エビデンスの構築。

**モデル性・波及性**

実証実験で良い結果が証明できれば、同様の課題を抱える全国の自治体への解決策となる。また高齢化や外国人の受け入れといった課題に対する解決策として広く展開できる。

自由記述欄

市民・団体

神奈川県

神戸市



Sailプログラム紹介

Sailプログラム申し込み



Sail活用状況  
報告・提案

市民・団体  
紹介



実証実験

アンケート解析



HELTE

**奈良女子大学 教授 寺岡 慎吾 先生のコメント**

この共同研究は、たんに対面的接触が少なくなってしまった高齢者をICTでつなぐのではなく、日本語や日本文化を伝えるというアウトプットを起点とした能動的なコミュニケーション環境を提供する社会実験である点が大きな特徴である。明確な目的をもったアウトプット起点のICT利用がもたらす効果を多面的に明らかにできれば、コロナ下はもちろん、ふだんから孤立しがちな高齢者の社会参加や生きがい、教える者同士の新たなつながり創出など、様々な場面での応用が期待される。